

市史通信

【目次】

- 牧野家の人びと
- 東京市の魚不買争議と横浜
- 写真で見る昭和の横浜③
ムア女史の歓迎会
- 資料紹介
- 新刊紹介
- 市史資料室たより



牧野兄妹 左から牧野金三郎・譲・メイ・映次郎 1912年頃

牧野勲関係資料(横浜市史資料室所蔵)

第9号

【発行日】2010年11月25日
 【編集・発行】横浜市史資料室
 〒220-0032
 横浜市西区老松町1番地
 横浜市中央図書館・地下1階
 【電話】045-251-3260
 【FAX】045-251-7321
 【E-mail】
 so-sisi@city.yokohama.jp
 【ホームページ】
 http://www.city.yokohama.jp/
 me/somu/housei/sisi/

牧野家の人びと

展示会「戦後横浜の復興を支えた文化人たち―牧野勲をめぐる人びと―」を、一月二十九日より開催する。その主人公である牧野勲とは、どのような人物だったのか。

牧野勲は、戦後の復興期から高度経済成長期にかけての横浜で、数々の文化行事や団体を立ち上げ運営した人物で、自伝的エッセー集『馬頸楼雑記』（有隣堂、一九八四年）を残している。盟友に、作家の北林透馬がいた。

元新聞記者の牧野勲が戦後開いた画廊喫茶ホースネックは、横浜の文化人たちが集う文化サロンとなった。このホースネックを拠点に、様々な文化行事が生み出された。牧野はその企画立案者であり、また資金集めから司会までその運営も一手に引き受けていた。こうして牧野が企画運営する文化行事によって、文化人や横浜の代表的な政財界人たちが交流を深めていった。そして、空襲と占領・接収で荒廃した横浜が復興を遂げる過程において、彼らは文化の復興の先頭に立っていたのである。

なお、牧野勲とホースネックについては、以前に『横浜』第16号（神奈川新聞社、二〇〇七年四月五日）に、「戦後横浜の文化サロンホースネック誕生物語」と題して紹介しているので、こちらも参照願いたい。

ヒギンボサムと牧野家

このような牧野の活躍の出发点は、どこにあったのだろうか。まず彼の生い立ちをさかのぼり、父譲の代の牧野家の人びとを紹介しよう。

勲が生まれた牧野家は、そもそも横浜のイギリス人貿易商ジョセフ・ヒギンボサムに始まる。彼は足柄上郡出身の牧野キンと結婚するが、一八八一（明治一四）年に英国へ帰国途上、上海で亡くなる。二人の間に、譲・メイ・映次郎・金三郎、そして双子の兄弟がいる、子どもたちは母親の牧野姓を名乗るようになった。ヒギンボサムに始まる牧野家の系譜については、生出恵哉「ヒギンボサム家の末裔たち」（『横浜文芸懇話会会報』牧野イサオ追悼集、一九六〇年四月二一日）が詳しく明らかにしている。ここでは、譲・映次郎・金三郎の兄弟を中心に紹介していくことにする。

譲（じょー）は、一八六七（慶応三）年生まれ、一六歳の頃、亡父の母国イギリスに親族を訪ねるが受け入れられず、ニューヨークに渡り、サンフランシスコを経てハワイへたどり着く。ハワイ島のナアレフ砂糖耕地で成功し、耕地内で商店を経営し、やがて浜村キク代と結婚する。マキ・喜一・穰（しげる）が生まれ、やがてサトウキビに病気が発生してハワイを引き揚げることになり、一九〇七（明治四〇）年に帰国した。そして、同年一〇月二〇日



完成間もなくの川崎競馬場観覧席 1907年頃
牧野勲関係資料(横浜市史資料室所蔵)



牧野映次郎・ケティ夫妻と子どもたち 年不詳 中央はハナカ
牧野勲関係資料(横浜市史資料室所蔵)

に桐畑(旧青木町)の牧野家で生まれたのが勲である。讓は横浜で株屋やコーヒー輸入などの事業を行った。一家は本牧の家に住んだが、後に磯子の滝頭に転居し、讓はその家で倒れ、一九二六(大正一五)年六月に亡くなる。

讓一家と勲については後ほど再び触れることにして、次に映次郎について紹介する。映次郎は一八七二(明治五)年生まれ、ジャーデイン・マセソン商会に入った後、一九〇二(明治三五)年に独立してヒギンボサムカムパニー館主となる。綿花雑穀の輸入と海上保険、株仲買を営んでいた。かたわら競馬にも熱心で、日本馬匹改良株式会社取締役を務め、京浜競馬倶楽部理事にもなった(『横浜成功名譽鑑』一九一

〇年、横浜商況新報社)。

京浜競馬倶楽部は、一九〇六(明治三九)年に設立され、翌年川崎競馬場で競馬を開催した。しかし、一九〇八(明治四一)年、新刑法に基づいて馬券の発売が禁止されると、川崎競馬場は廃止、京浜競馬倶楽部も一九一〇年に合併して東京競馬倶楽部となった。川崎競馬場跡地には富士瓦斯紡績の工場が建設され、一九一五(大正四)年に完成している。この工場が空襲で焼失した後、戦後新たに川崎競馬場が開設されるが、先の川崎競馬場とはまったく系譜が異なる。

牧野家のアルバムには、開設当初の川崎競馬場の他、池上競馬場・目黒競馬場などの写真が残されている。とく

に、たった二年で廃止された川崎競馬場観覧席の写真は、たいへん貴重と思われる。

映次郎には、ハナ・晴(はれー)ら七人の子どもたちがいた。この内、ハナは曲直瀬正雄と結婚して曲直瀬プロダクションを設立、その娘美佐晴はバイオリン奏者で、戦前はダンスホール・メトロポリタンの経営に関わったりしていたが、戦後は横浜でバイオリン教室を開いていた。

このように、映次郎は貿易商として成功し、名士の集まる競馬の世界でも一定の地位を築き、その一族は華やかな芸能・音楽の世界で成功を収め、現在に至っている。

讓・映次郎の弟金三郎は、一八七七(明治一〇)年生まれ、ハワイで今も残る唯一の日本語日刊新聞『ハワイ報知』の創刊者として、ハワイの歴史に名前を残している。日英両文による『牧野金三郎伝』が、一九六五年に刊行されている。そのなかの異父弟土屋青茅の証言によると、若い頃は遊び好きでけんか早く、持てあました兄映次郎がハワイの讓の元へ送り出したらしい。

一八九九(明治三二)年にハワイ島に渡り、讓が経営する商店などに勤務した後、ホノルルに移り、自ら牧野薬店を開業、一九〇三(明治三六)年に岡村道枝と結婚する。兄讓の帰国後、

讓と勲

讓の記録は、あまり残っていない。『牧野金三郎伝』を見ると、金三郎の

「A Pictorial History of The Japanese in Hawaii 1885-1924」(Bishop Museum Press, 1985)。一九二二(明治四五)年七月には、母キン危篤の知らせを受けて帰国する。そして、同年九月にハワイに戻ってから間もなく、一二月七日に『布哇報知新聞』を創刊する。

その後も、ハワイ日本人会の創立に加わり、排日気運が高まるなか廃校の危機に追い込まれたハワイの日本語学校のため、先頭に立って法廷闘争を行うなど、ハワイ日系人の権利と地位を守る活動を続け、一九五三(昭和二八)年二月一七日に七六歳で亡くなった。金三郎の死を悼み、横浜でも勲が中心となって、同二三日に久保山光明寺で追悼会を行っている(『神奈川新聞』一九五三年二月一九日)。



牧野金三郎 出獄直後の記念写真
1910年 牧野勲関係資料
(横浜市史資料室所蔵)



牧野謙一家 左からマキ・喜一・勲・謙・穰
・キク代 年不詳
牧野勲関係資料(横浜市史資料室所蔵)

の叔父金三郎の元へ向かう兄穰のために、「パパ」譲が自ら料理したスベシャル・メニューだった。譲は、そのまま眼を覚ますことなく亡くなった。このとき勲は、伊勢佐木町のオデヨン座にいた。勲は本牧の家から北仲通にあった横浜小学校に通い、その頃から伊勢

兄である譲について触れている証言も多い。それらによると、譲はたいへん親切で面倒見のよい人格者であったようだ。ナアレフ耕地の人びとは皆何かにつけて譲に相談し、譲の世話になったという。また、一九〇〇(明治三三年)のナアレフ本願寺創建に、譲は初代信徒総代として尽力したらしい。弟の金三郎が若い頃はやんちゃで、後には争議や法廷闘争の先頭に立つなど派手な動きが目立つのとは対照的に、譲は人の前で目立つことよりも、一步引いて人の面倒を見ることで信頼を得ていたようだ。目立たず面倒見のよいところは、様々な団体や文化行事の世話役を引き受けていた勲に引き継がれているのだろう。

めたことだったという(牧野イサオ『馬頸楼雑記』)。おそらくこれは日本の受入側のことで、ハワイ日系人の歴史書によればハワイ側の主催者は田阪養吉、日布時事他日本語新聞が賛同者となっている。同書掲載の母国観光団の写真中には、譲の姿を確認することができ(『A Pictorial History of The Japanese in Hawaii 1885-1924』)。また、先の牧野家アルバムの中にも、邦人観光団らしき集合写真が何枚もあり、いずれもその中に譲の姿がある。このような譲の人柄は、家族にも強い印象を残した。勲は「パパのスペシヤル・メニュー」と題して、父の人柄にまつわるエピソードを書き残している(『馬頸楼雑記』)。一九二六(大正一五)年、譲が脳溢血で倒れたと知らせを受けて、外出先から慌てて家に戻った勲は、客間のテーブルの上に並べられた料理の数々を眼にした。オードブルやローストチキンなどが、きれいに盛りつけられていたという。ハワイ



『メトロポリタン』表紙
1931年6月27日 牧野勲関係資料
(横浜市史資料室所蔵)

こうして全盛期を迎えるなかでも、ダンスホールに対する統制は徐々に強まっていった。そして、同年九月の満州事変を経て、一九三七(昭和一二)年七月の日中戦争勃発以降一九四〇年までの間に、横浜のダンスホールはすべて閉鎖されていった。
北林透馬と牧野勲
一九三〇年、中央公論社が

佐木町に出入りし始め、関東学院時代には本格的な「伊勢ブラ党」になっていたという。本屋や映画館に通い詰めたらしい。一方、父譲は『横浜毎朝新報』に「海港夜話」という連載を持つなど文筆の才も発揮したが、兄穰もハワイに渡るまで『横浜毎朝新報』の記者をしていた。勲は関東学院を卒業してから、母方の親戚でもある映画カメラマンヘンリー・小谷の助手を二年ほど務めていた。その後、兄の跡を継いで、『横浜毎朝新報』の記者となる。さらに一九三〇(昭和五)年から三二年頃に勲は、いとこの晴がマネージャーをしていたダンスホール・メトロポリタンでサブマネージャーを務め、広報誌『メトロポリタン』の編輯兼印刷発行人にもなっている(以下、横浜市史資料室所蔵「牧野勲関係資料」による)。

盛期を迎えようとしていた。ところが、ダンスを抱えるダンスホールは、風紀の面できつと批判を受けていた。そこで、「舞踏場ノ健全ナル発達繁栄ヲ図」るため、一九三一年に横浜舞踏場協会を結成する。「営業主相互間ノ無益ノ闘争軋轢ヲ避ケ」、「舞踏手ノ風紀肅正」を目指そうというのである。協会結成の動きは、四月八日の呼びかけに始まる。六月二日に創立総会を開催し、太平洋舞踏場・メトロポリタン舞踏場・横浜ダンスホール・ブルーバード舞踏場・カールトン舞踏場が参加して結成された。すでに一九二八年には舞踏場取締規程が制定され、ダンスホールは許可制となり、警察の取締対象となっていた。そのため、創立趣意書においても「監督官庁指導ノ下ニ」とうたっている。また、創立総会の後、改めて七月一日に加賀町警察署で発会式を開催している。協会結成の背後には、警察の指導があったことだろう。

募集した文壇アンデパンダンに、北林透馬の「街の国際娘」が入選、話題となった。北林はモダンボーイ第一号と言われ、一躍人気作家となる。北林はその後も横浜を出ることはなく、山手の自宅に住んで文学少女たちに取り巻かれていたという。その頃、牧野勲と篠田丙馬が常に北林に寄り添っていたと、後の北林夫人余志子が書いている（『横浜文芸懇話会会報』第三号、一九七二年七月三一日）。

北林と牧野のそもその出会いは定かではないが、二人が横浜の華やかなモダン文化のなかにいたことは確かだった。そんななか一九三三年夏に、二人を中心に海港文学の会が結成される（佃実夫編『神奈川人物風土記』昭和書院、一九七三年）。ところが、その直後に牧野は満州の奉天毎日新聞社に招かれて、編集局長に就任する。牧野が満州に渡ったことで、海港文学の会はいったん休止状態となる。その頃の満州は、「開港当時のヨコハマをしのげるものがあつた」という（『馬頸楼雑記』）。ダンスホールでも、「横浜のホールが引越したのではないか」と思われるほど、「バンドメン、ダンサー、ダンス教師になじみの顔がならんでいた」。戦後牧野たちが始めた文化行事にたびたび顔を出す小生夢坊とも、満州で出会った。

知極東総局長となり、翌年には布哇報知の従軍記者として、再び中国大陸に渡る。帰国後の一九三八年四月、ハワイから皇軍傷病兵慰問団がやって来ると、牧野が日本各地を案内した（『馬頸楼雑記』）。皇軍傷病兵慰問団の旗を手にしての記念写真が、牧野家のアルバムに残されている。場所は、鎌倉の鶴岡八幡宮と皇居である。牧野勲も、端の方に写り込んでいる。

この間にも、「海港文学の会」の企画が徐々に再燃していったらしく（篠原あや「神奈川新聞社との五〇年〈海港文学の会〉」『横浜文芸懇話会会報』第六二号、一九九〇年一〇月一四日）、まず一九四〇（昭和一五）年一月に北林・牧野を中心に海港文学の会を結成した（新聞報道では名称は海港文学研究会）。そして、これをさらに横浜の「文学青年少女」にひろげようと、三月一〇日に横浜橋樑帝國ホテル食堂で創立茶話会を開催することにした（『横浜貿易新報』三月五日）。事務所は南仲通三丁目に置かれたが、そこは布哇報知新聞の横浜通信部であった（『横浜貿易新報』三月六日）。

三月一〇日当日は、四〇人以上の文学青年少女が集い、矢野目源一・安田樹四郎ら文学者・作家も出席して盛会であったという。この日、横浜貿易新報社から学芸欄を同会に提供したいと提案があり、承認された（『横賀』三月一一日）。すでに日中戦争が始まって戦時統制が強まり、用紙不足で機関

誌の発行も望めない会側の状況と、三宅磐死去後苦境に立たされて学芸欄の担当者も雇えないという横賀側の事情が、一致してのことだった。

学芸欄は、北林透馬の責任編集の下、一五日から設けられることになった（『横賀』三月二三日）が、現在のところ一五日付の紙面は見つかっておらず、一六日から七月二六日までの学芸欄紙面が確認できる。内容は、作品の募集・発表と情報が主であった。編集の実務は牧野勲が、会の運営実務は井上薫が、それぞれ実際には担当していたらしい。戦時体制が強まっていくなかで、海港文学の会の活動はこの学芸欄の編集にとどまったようだ。

北林は一九四一年一月に報道班員として徴用され、南方で日米開戦を迎える。日本に帰国後は横浜で過ごし、横浜大空襲で自宅が焼失している。また、牧野も再び奉天毎日新聞に招かれ、満州に渡る。その後、牧野はいくつか新聞を渡り歩き、一九四四年頃には北京の『東亜新聞』に入った。そして戦争が終わると、中国政府の意向で『河北日報』の記者に従事し、翌一九四六（昭和二一）年に北京から帰国する。帰国後の牧野は、日本社会党の機関紙編集にたずさわるが、安月給のために賃上げを要求して「クビになった」という（『馬頸楼雑記』）。そこで、翌一九四七年初夏、尾上町に三春という喫茶店を開店する。これが、後の文化サロンホースネックのそもその始まりだった。



『布哇報知』の紙面で紹介された牧野勲
1949年9月29日

牧野勲関係資料(横浜市史資料室所蔵)

りだった。同年一〇月一日に横浜で発行された、『ダンス・マガジン』第一号という雑誌が残されている（『牧野勲関係資料』）。社交ダンス愛好家のための雑誌で、牧野が編集顧問に就いている。開店間もない三春の広告が掲載されており、「ダンスファンと音楽家のクラブ」とうたっている。また、牧野と北林が短文の随筆を掲載している。三春はやがて、一九五三（昭和二八）年一〇月九日に港町五丁目に移転、店名もホースネックと改める。この間一九四九年頃、牧野はハワイ報知の支局を置き、特置員として記事を送っている。そして、喫茶店店主として牧野は、戦後再建された加賀料理飲食喫茶業組合の副組合長となり、一九五〇年から五年間横浜商工会議所の議員となる。このことが、牧野が北林と組んで、様々な文化行事を企画する出発点となったのである。（羽田博昭）